

楽譜を読んで歌うことと 翻訳はよく似ている

足立理英子 さん



翻訳言語

英日



ジャンル

実務

出版



居住地

兵庫県

子育て中も働くことを視野に

「養護学校の英語講師として働き、結婚を機に退職しました。30代は専業主婦でした」と語る足立理英子さん。その間も「働くんだ!」というビジョンを持ちながらの子育てだった。後にPTAで得た人脈で小学生から高校生対象の英語塾を7年間ほど自宅で開いていた。2001年からは神戸の公立小・中・高等学校での情報教育指導員を皮切りに教育界に復帰。しかし、大学で専門だった英語に戻りたくて、3年後には公立中学校の英語講師となる。足立さんの、英語で働くという思いは人一倍だった。公立中学では任期の関係で、やむなく民間派遣社員に登録することになった。これが後に思いがけない転換点となる。そこで派遣先が川崎重工(株)で、台湾新幹線用の英文マニュアル編集を担当し、日英の下訳と英文チェック等を手掛ける。

台湾新幹線は、仏・独・日共同プロジェクトだったため、英語を母国語としない国ばかりだった。3カ国それぞれの観点が違い、例えば日本は目視確認(ビジュアルチェック)を大切にしますが、独ではコンピューターがするものとしてあまり必要性を認めないな

ど、新鮮な発見も多かった。

「独シーメンス社から社員が派遣されており、雰囲気はヨーロッパ。日本側のエンジニアの英語もアメリカ訛りはなく、それまで私はアメリカ英語一辺倒だったのが、ヨーロッパに目を向ける一因になった」と、足立さん。

派遣先で下訳、そして翻訳へ

この頃、登録していた派遣会社の担当者から「これだけの経歴があったら、私だったら翻訳をする」と言われたことをきっかけに、週末に開講する翻訳スクールに通い始めた。その後、翻訳に絞って仕事を探し、10社近く履歴書を送って、やっと採用になったのが外資系製薬会社の日本イーライリリー(株)だった。ここから、医療翻訳(英日)の世界に足を踏み込んだ。

仕事では、社内向けトレーニング教材、GMP文書(医薬品及び医薬部外品の製造管理及び品質管理(Good Manufacturing Practice))などを手掛けた。医療の世界は未知だったが、知識が増えていくのが面白かった。

フリーランスの翻訳者となったのは2012年春から。長年住んでいる神戸は、国際的港町とはいえ、地方都市で仕事を得るのは難しい。そのため足立

あたち・りえこ／東京女子大学短期大学部英語科卒業後、特許事務所働きながら青山学院大学二部文学部英米文学科に編入、1982年卒業。養護学校で英語講師となり、結婚を機に専業主婦。その後、自宅で英語塾、中学校で英語講師を経験し、派遣社員として川崎重工(株)で英文マニュアル編集を担当。続いて外資系社内翻訳者を経験し、フリーに。

さんは、積極的にSNSやWebを活用している。例えば、日本出版クラブが主宰するライブラリー「洋書の森」から本を探して企画書を作成したり、出版翻訳のオーディションに応募するなどWebを利用して出版翻訳の分野へも挑戦している。分野は、自伝や自己啓発書、科学や芸術などの一般向け知識本など多岐にわたる。

そして、バベル・プレスのCo-PUB翻訳出版オーディションに応募、合格して『play』の出版が決まる。芳賀靖史監訳、6人の共訳で2013年3月の刊行予定だ。

意外なことが翻訳につながる。足立さんは、英語のスピーチとボイストレーニングに力を入れ、『なんで英語やるの?』(文藝春秋)の著者である中津療子先生から20数年前に訓練を受けたことが役に立っているという。さらに、趣味で始めた市民コースも同じような感覚で楽しんでいる。

「楽譜を読んで音符を音にすることと、本を読んで文字を美しい言葉におきかえる翻訳はよく似ていますね」と嬉しそうに語る。2012年10月には、所属するコーラスグループのメンバーと一緒にヨーロッパへ演奏旅行に出かけるなど、精力的に活動が続けている。